

今、女性たちは チャンスの隣にいる

上智大学で国際政治学の教授として教鞭を執り、その後、軍縮大使、国連小型武器会合議長を務めたのち、2003年に衆議院議員に初当選。小泉政権のもとで、少子化・男女共同参画大臣を務めた。現在は、千葉県選挙区選出の参議院議員として忙しい日々を送っている猪口邦子さん。なぜ政治の道に入ったのか。政治の世界で勝つための秘訣とは。

参議院議員 猪口邦子さん

【プロフィール】 千葉県生まれ。上智大学外国語学部卒業。イエール大学政治学修士号取得、博士号(Ph.D.)取得。上智大学法学部教授、軍縮会議日本政府代表部特命全権大使、軍縮会議(ジュネーブ)議長等を経て、2005年に衆議院議員初当選。内閣府特命担当大臣として、少子化問題・男女共同参画に取り組む。2010年より参議院議員。自民党沖縄振興調査会会長。



世代を超えて受け継ぐ バトン

「国際政治を志した理由は高校時代にあります」と猪口さん。尊敬していた高校の国語先生の一言がきっかけだったという。

「私は少々とんがった生徒で、先生方に対しても批判的で反発ばかりしていました。でも、担任の国語の先生だけは尊敬していて、その先生にあるとき『私は戦争未亡人なのよ。何があるのか知らないけれどあなたの悩みなんでどれほどのものなの?』と言われたのです」。

以来、「尊敬していた職業婦人がなぜ戦争未亡人にならなければならなかったのか。なぜ第二次世界大戦は始まったのか」が、猪口さんにとつての問いとなった。

「同様の文脈で、戦争から生き延びて千葉県の木更津に清和女子短期大学(現清和大学)を開学した、故真板益夫氏を尊敬していました」忘れられないのは、「なぜ第二次世界大戦は始まったのか」と聞いた時の言葉。「女子教育がなかったからだよ。女性が教育を受け声を上げていたら、戦争は起こら

なかった」と。

猪口さんは、この二人から「平和」と「女子教育」というテーマのバトンを受け取ったと感じている。

ロールモデルの重要性

猪口さんの生き方に大きな影響を与えたのが父親の存在だ。三人娘の長女に生まれた猪口さん。男の子が欲しかった父親に男の子のように育てられた。「女性も職業を持つべきだ」と思っていた両親は、家庭と両立できる仕事として、ピアノが英語の先生になることを望んでいた。「ところがあるとき父が、英国にジョーン・ロビンソンという女性の経済学者がいることを知り、学者の道もあると言い出したのです。ロールモデルというのは大切です。このせいで私は10歳くらいから学者になることを決めています」。

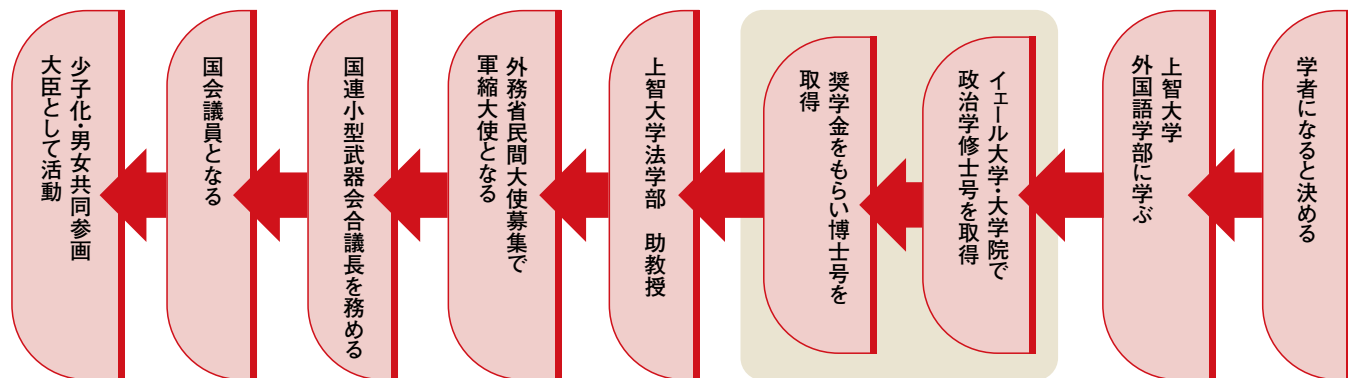
上智大学外国語学部を卒業したのち、イエール大学の大学院に進学し政治学修士号を取得。留学したのは、日本には政治学を学べるところがなかったから。当時は、アメリカの東部が

政治学の最先端だった。従来のドイツの政治学の流れとは全く異なり、実証主義、検証主義に重きをおく、数量政治学がメインストリームとなりつつあった。

1ドル360円の時代、奨学金を得ての留学だったが、奨学金は一人1年間しかもらえない。そこで1年でMA(修士号)を取って帰国するつもりでいた。すると、大学の先生が「君は勉強を続けるべきだ」とすぐに給付型奨学金をもらえるよう手配してくれた。「どうやら私は外国人でありながらトップの成績だったらしいのです。おかげで授業料も生活費も出してもらったことができた博士号を取得することができました」。猪口さんが現在、国政で給付型奨学金導入を推進しているのは、奨学金のありがたさを痛感した経験があるからだ。

信念を持ち続けていれば 道は拓ける

帰国の準備をしている猪口さんを、大学の先生は引きとめた。「ここにいれば助教教授になれるが日本に帰ったら君は失業者じゃないか。大学で合理的選



択モデルを学んだのに」と。この申し出を振り切って帰国したら、先生の言った通りの失業者。毎日部屋の壁を眺めながら、論文執筆に専念した。

そこへ、プリンストン大学を出て上智大学の教授をしていた鶴見和子さん（故人）から電話があり、上智大学の研究所で助手として手伝ってくれないかという。それがその後、法学部の助教授の道につながった。まさに天からの救い。学んだことが活かせるまたとないオファーだった。「信念を持ち続けていれば、道は拓かれる」と実感したという。

「私が心がけてきたことは『常に世界最高水準の授業を提供すること。今日の授業は今日1回しかないのだから、最高の仕事をしなければと思ってやってきました』」。

そんなある日、外務省で民間から大使を募ることがあり、猪口さんに声がかかった。軍縮大使という大役。国際政治学という猪口さんの専門性を活かせるポストだったが、すでに結婚していた猪口さんは引き受けるかどうか迷った。結局夫の「その

日のために生まれたのだと思っ
て引き受けたら」というひと
言に背中を押された。任期中に、
国連小型武器会合議長も務め、
重要な交渉会議に参画するとい
う貴重な体験もすることがで
きた。

一本の法律で 世の中が激変、改善できる

任期を終え、帰国した猪口
さんを待ち構えていたのは、当
時の小泉純一郎首相からの「国
會議員になつてくれないか」と
いう電話。官邸に呼び出された
が、おそらく「君は学者で机上
の空論ばかりやってきたのだろ
うから、そろそろ具体の仕事をし
たらどうだ」とでも言われる
のだろうと思っていた。「もし、
そう言われたら断っていたかも
しれません。私は命がけで学問
に取り組んできましたから。と
ころが、総理の言葉は『あなた
のやってきたことは素晴らしい。
学問の道とは尊いものですね』
と」。全肯定されると反論でき
ないもの。そのあとで「しかし
僕が生きてきた政治という道も
とても価値があるものなんだ、
わかつてくれるかい」と。説得

とはこういうものかと驚くと同
時に心を動かされた。かといっ
て、「お受けします」とは答え
られなかった。

少し時代はさかのぼるが、
1985年、男女雇用機会均等
法が成立したときのこと。女性
は努力しても報われない、就職
先すらないという時代が長く続
いていたが、この一本の法律によ
って、これまで当たり前に行われ
てきた「男子のみ」という採用
条件が禁止となった。「法律に
よって世の中が大きく変わるの
を目の当たりにし、法律の力を
強く実感しました」。

そのとき以来、立法府への関
心は持っていたものの、国会議
員という選択肢は思いもつかな
かった。しかしこの時も、「夫に
背中を押され」、ついには引き
受けた。

2005年に立候補し衆議院
議員に初当選。小泉内閣のもと
で、少子化・男女共同参画大臣
に就任する。大臣の数は決まっ
ている中で新たに少子化大臣を
設置するということは、他の大
臣を一人減らさなければならず、
大変だったと思われるが小泉首

相は断行した。

勝つためには 時代を読み誤らない

猪口さんの専門は外交分野だ
が、小泉首相は「君は大学で
女子大生の悩みを見てきただろ
う。大臣は人の悩みを見ていな
い人にはできない」と。

この頃、合計特殊出生率は減
少の二途をたどり、猪口さんが
当選した2005年は1・26で
過去最低。しかし、猪口さんの
大臣就任後、増加に転じている。
なぜそれが可能だったのか。

「何かの長になったときに大事
なことは、その分野を短期間で
主流化することです。私が大
臣に就任した当時、少子化問題は
超マイナーなテーマでした」。

就任したのは10月。2カ月で
勝負しようと思った。まず、タ
グマッチを組んだのはメディア。
わかりやすい言葉で、ことある
ごとに、少子化問題を取り上げ
てもらおうよう意見交換を重ね
た。そして、翌年の元旦。

「すべての全国紙が特集に
『少子化問題』を取り上げ、
勝った!と思いました」。これ
を機に認識の革命が起こる。



少子化はマイナーではない。日本が取り組むべきメインテーマとなつたのだ。実際、特集が掲載された2006年の初頭から婚姻率が上がり、それがそのまま、合計特殊出生率の増加につながった。

ここで教訓としたのは、「やると決めたら、目標設定をし、集中力をもって電光石火で勝負をかけること」。民主主義の政治の世界で勝つためには、「大きな時代の流れを読み間違えないこと。その中でビジョンを持つこと。ビジョンが時代の流れとずれていたら絶対に勝てません」。

たとえば、これからのトレンドは、ダイバーシティー、多様化、インクルージョン、共生型社会だ。この文脈の中でビジョンを発信すれば間違いはない。この逆のコンセプトでやると絶対に勝てない。「トレンドを見誤らないためには、学者たちの仕事もちゃんと見ておいたほうがいい」。

世の中を変える、 たった二つの解

「今、世の中には解決しなければならぬ問題が複雑に山積

しています。「見どうすることもできないように見えても本当に知的なパワーを結集すれば、ただ二つの正解にたどり着くことができます」と猪口さん。

たとえば、世界的に大きな問題の一つに「乳幼児の死亡率の高さ」がある。これを解決

するために、医薬品や食料などの物資を送ると考える人も多いだろう。しかし、何十万、何百万の乳幼児を救うにはいくら送ってもきりが無い。では正解は？「女子の識字率を高める」となる。「識字のある女性はその子を守り抜くことができるでしょう。文字が読めなければ、病気の赤ちゃんをどこに連れて行けばいいか情報が限られます。薬を与えても文字が読めなければ正しい使い方がわかりません。国連のチームがこの解を発見し、実際に乳幼児の死亡率は激減したのです」。

もう二つ例をあげると途上国で国連が進めている女子教育の普及活動。しかし、せっかく小学校に通えるようになった女の子たちが学校を途中でやめてしまふ。この問題をどう解決する

か。答えは「全ての学校に女子トイレを作る」こと。学校には女子トイレがなく、思春期の女子が共同トイレを使いたがらなかったのだ。トイレ問題が解決すると、本当に女子たちは学校に行くようになったという。

日本の課題にも目を向けてみよう。たとえば、東京への一極集中をどう解決するか。答えは「賃金の高い女性の仕事を地方に作ること」。東京には、圧倒的に男性より女性が多く出ている。地方では女性の仕事が少ない賃金が低すぎるので女性の賃金の高い職業をたくさん作れば女性は地方にとどまる。女性がいるところには男性も集まる。婚姻率の低下や少子化問題の改善にもつながる。

逆に、答えが間違っていた場合の例を挙げるなら、日本のかつての少子化対策だ。少子化の原因は女性が社会進出するからだと言われていたが8割の女性が働いているのに子どもの数は増えている北欧の例に見るように、実際はその逆。女性が働きやすい環境を作れば子どもの数は増えるのだ。

「二つの問題を徹底的に考え抜けば、必ず正しい答えにたどり着くことができます。一点突破、全面展開です。女性のみなさんには、ぜひ知的な存在であってほしい。ぜひ、このことを考え抜くことを習慣にしてほしい」。

チャンスはなくても チャンスのすぐそばに

女性にはチャンスがない、がんばっても報われなさと感じている女性はいくら多いだろう。しかし、「チャンスはなくてもチャンスのすぐ隣にいなさい」と猪口さんは言う。バレエのプリマドンナが急病で倒れたら、すぐ代役ができるよう準備するのと同じ。「チャンスに備えよ常に」が猪口さんの好きな言葉だ。

2016年4月に女性活躍推進法が施行された。まさに今、女性たちはチャンスの隣にいる。私たちは、このチャンスを活かして、1985年の男女雇用機会均等法の制定以来、手渡されたバトンを次の世代につなげなければならぬ。

◆ 2016年9月17日講義より

映画に込めた願い

50歳で映画監督としてデビュー。認知症、介護、家族の絆などをテーマとした映画を通じて、女性とは、人間とはどう生きるべきかを問うてきた。70歳となった今年、ドキュメンタリー映画『不思議なクニの憲法』を公開。憲法改正に向けての議論が高まる中、主権者である国民に、憲法について学び、考えてほしいと話す。

松井久子さん

【プロフィール】 東京出身。早稲田大学文学部演劇科卒業。雑誌ライターを経て、1976年、俳優のプロダクション（有）イフを設立。1985年（株）エッセン・コミュニケーションズを設立し、プロデューサーとしてテレビ番組を多数企画・制作。1998年に『ユキエ』で映画監督デビュー。内外の映画祭で高い評価を得る。その後も『折り梅』、『レオニー』、『何を恐れる』と、社会的テーマを扱った良作を次々発表。2016年5月に公開した『不思議なクニの憲法』は全国で自主上映中。



市民の寄付だけで映画を製作

松井さんの作品は、市民たちからの熱い支援によって作られている。公開後も全国のサポーターによる自主上映会で公開されてきた。介護問題を取り上げた『折り梅』は、公開から2年間で100万人の観客を動員。全国1350カ所を超える自主上映会が行われている。世界的に知られる彫刻家イサム・ノグチの母を描いた、日米合作の『レオニー』はアメリカでも好評を博した。

シングルマザーとしてがむしゃらに働いた30、40代

「この年になって、ようやく自分がしたい仕事ができるようになった」と松井さん。25歳で結婚し、夫のDVに耐えかね33歳のときに5歳の子どもを連れて離婚した。早稲田大学文学部演劇科を卒業し、芝居づくりの仕事が夢だった。しかし、子どもと2人食べていくことが最優先。仕事を選んでいくことができなかった。

少しでも芝居や芸能の世界に近づきたくて選んだ仕事は、女性雑誌や芸能雑誌のライター。その後、30代の半ばで俳優のマネージメント

を手掛けるプロダクションを設立。ドラマや映画づくりの現場を遠目に見ることができたのは幸せだったが、所詮自分は外側の人。内側で作る側に立ちたいと憧れを募らせていたという。

その頃から2時間ドラマがブームとなる。毎日どこかのテレビ局でドラマが放映されているが作り手が足りない。ドラマの視聴者は圧倒的に主婦たちなのに、監督も脚本家も男性ばかり。主婦の気持ちがわからない男性たちが手探りでドラマを作っている。

「主婦の気持ちなら私のほうがわかる」と思った松井さん。400字詰めの原稿用紙60枚ほどのドラマを書いて、「主婦が見たいのはこういうストーリーだ」と、あるテレビ局のプロデューサーに提案した。面白い、と次々採用されるようになったのはいいが、報酬としてもらったのはプロット（あらすじ）代として2万円。

ドラマ1本の制作費が5000万円だというのに安すぎる。「するとお世話になっていたプロデューサーから『じゃあ自分で制作会社を作ればいい』と助言されて、テレビドラマの制作会社を立ち上げたのです」。やつと夢だったドラマ作りができ

る！働きざかりの40代は、2時間ドラマづくりに明け暮れた。手がけたドラマは10年間で約40本。充実した毎日だったし、受注額も大きかった。しかし、監督や俳優への支払いなど、出ていくお金も大きく、常に自転車操業。他の制作会社との競争も激しくなり、よいドラマを作るよりもいかに制作費を安く上げるかが競われるようになった。加えて、ドラマブームの陰り。視聴率の取れないドラマよりもバラエティ番組のほうが制作費も安く簡単にできる。ドラマの数は減り、残ったのはサスペンス物だけ。「でも、私はサスペンスドラマだけは作りたくなかった。2時間の中でどんな人が死んでいく。子どもたちがそんなドラマを見てどう感じるだろう。親として、そんなドラマは作れないと思っていたのです」。しかし、会社を続けるにはサスペンスドラマを作るしかない。松井さんは悩んだ。

自分の好きなことを仕事にしたい、そう思いつて走ってきた。ところがいつの間にか、家賃を払い、社員に食べさせていくために仕事に追われる人生になっている。作品の質よりも、視聴率に二喜憂し、神経をすり減らす毎日。社員たちとその

▼映画初監督作品『ユキエ』

原作の『寂寥郊野』（吉目木晴彦著、講談社）は1993年の芥川賞受賞小説。アメリカのルイジアナ州を舞台に、国際結婚と老いを通して夫婦の深い愛の絆を描く。



家族のことを思うと胸が痛んだが、「二度一人になってみよう。もう一度原点にもどって自分がほんとうにやりたいことは何か見つめ直してみよう」と、会社をたたむことにする。すでに子育てが終わりに差し掛かっていたことも、松井さんの決意を後押しした。

50歳で素人から映画監督に

何もかも捨ててゼロになった松井さんの心の中に降りてきたのは「映画を作りたい」という想いだ。『ドラマつてエネルギーを注いで作っても、一度放映されたら花火のように消えてしまう。でも、映画ならいい作品であれば何年も観てもらえる。いい映画を作って世に残したい』。

松井さんの初監督作品は、『ユキエ』。1993年、芥川賞を受賞した吉目木晴彦の『寂寥郊野』が原作。戦争花嫁としてアメリカに嫁

の女性には通じるはず。そう信じていましたが、男性たちには全く相手にされませんでした。

いだユキエ。差別を受けながらも2人の子どもをもうけ、幸せに暮らしていたユキエがある日、アルツハイマーを発症する。「当時、アメリカではアルツハイマーは社会問題になりつつあった。日本もこれから高齢化社会になる。この問題は日本でも絶対に関心が高まるはずと思った」と松井さん。アメリカに取材に行つて戦争花嫁の生の声も聴き、この人たちのことを知ってほしいとも思っていた。しかし、今から23年も前のこと。「早すぎたし、老人2人が主人公なんて、こんな暗いテーマではだれもスポンサーになってくれない」。

それでも3年がかりで2億円という資金が集まった。すぐに、敬愛する新藤兼人氏に脚本を依頼。脚本ができると次は監督探した。「監督も新藤兼人さんしかありえない」と思っていました。ところが、『何を言っているんだ、これは僕の映画ではない、あなたの映画ですよ。3年もかけて苦労してお金を集めたのだから、あなたが監督をしなれば。絶対にできますよ』と。じゃあやつてみようかなと。

苦労したのは資金集めだけではない。映画はアメリカで撮影するつもりだった。「全くの素人で、女性のあなたがアメリカに行つて映画を撮ろうなんて、ジープとスニーカーでエベレストに登るようなものだ」と言われた。「これまでドラマを作ってきた、私が女性として関心を持ってきたものは視聴者にも必ず共感されてきた。この映画も絶対に同世代

でも、アメリカだからできたのかもしれない、とも振り返る。「マナージャー時代にもテレビプロデューサー時代にも『あんなおばさんに何ができる』と陰口を言われてきました。日本の男性中心の制作現場では、素人の女性監督の言うことなどだれも聞いてくれなかったかもしれません」。

**外国での初仕事
リーダーシップの大切さを痛感**

しかし、言葉も通じないアメリカで、監督を務めるのは並大抵のことではなかった。

「いかにリーダーシップが大切な

ということを、身を持って知りました」。

ベテランのアメリカ人俳優は、松井さんの指示に、ことごとく反発する。指示をすると大きくため息をつき、露骨に嫌な顔をする。

「たとえば、妻がアルツハイマーだと医師から告知されるシーンで、その俳優は、ボロボロと涙を流す。でも私の演出は違う。泣かずにぐっとこらえることで観客に悲しさが伝わる。そこですぐに泣かれたら観客は泣けない。そう言う、彼は激怒して言いました。『日本の映画がどうして世界でヒットしないかわかるか。そんな感情は日本人にしか伝わらないからだ。せつかくアメリカに來たのだから、俺の言うとおりにしろ』と」。

しかし、松井さんは折れなかった。「意見がぶつかるたびに撮影が停まる。こんなことでいつ終わるのだろう、みんなうんざりしているのではないだろうか」と疑心暗鬼になった。「地獄のような現場体験でした」。しかし、ついにクランクアップを迎える。そのときにスタッフたちから言われた言葉が忘れられない。「久子、バトルにウンザリしてあなたがあの俳優の言いなりになつていたら、僕たちは絶

対についていけなかった。あなたには明確なビジョンがあり、自分を最後まで曲げなかった。だから僕たちは信頼してついていけたんですよ」。

自主上映会で 静かに広がるメッセージ

映画は、東京銀座のシネスイッチで2週間だけ公開されることが決まっていた。アメリカでお金を使い果たし、宣伝費は残っていなかった。前宣伝としては、朝日新聞に小さい記事が「つただけだった」ところがその小さな記事を見て、来てくれた人から口コミで広がって、8週間のロングランに。評判は地方都市にも広がり、1館だけの上映の予定が6館に広がった。その後も全国各地で自主上映会が開かれた。

「『こういう映画を待っていた』『やはり女性を作る映画は違う』『あきらめずにまた作ってほしい』……。私の映画はこういう人たちの声に支えられて作ってられました」。

なぜ、自分は応援してもらえたのだろ。松井さんなりの分析は次のとおりだ。

一つは、「この人は自分の代弁者になつてくれると思ってもらえること」と、そして「自分がやりたいと思うたら他人が何と言おうと最後まで

決してあきらめないこと」。それが「この人は本気だな」という信頼につながる。「人から何か言われるたびに気持ちが悪くぐらぐらするようでは、応援してもらえません」。

松井さんの最新の映画は『不思議なクニの憲法』。声高に憲法改正反対を唱える映画ではない。国のかたちを決める憲法に誰もが当たり前に関心を持ち、正しい知識を得、理解を深めるために作られたドキュメンタリー映画だ。「怒りや憎しみから出発する議論は広がっていかない。対立よりも冷静な選択を。そのきっかけになれば」と松井さんは言う。

映画を見た人たちからは「心を揺さぶられた。この映画のメッセージが1人でも多くの人に届き、日本を動かす大きなうねりにつながって欲しい」「日本中の人々に観てほしい。自分でもできる協力をしてほしい」などの声が寄せられている。各地での自主上映会も少しずつ広がっている。

「私たち一人ひとりが個として大切にされる自由な社会を守りたい」。映画に込めた松井さんのメッセージは静かに、しかし力強く広がっている。



▲最新作『不思議なクニの憲法』
憲法には「私はどう生きるべきか」書いてある。私たちが決めなければならないのに、「どこかの偉い人」たちが決めている。私たちは、とっても不思議なこのクニの国民。今だからこそ世に問う、ドキュメンタリー作品第二弾。参院選後のリニューアル版!



▲監督第4作『何を怖れる—フェミニズムを生きた女たち』
70年代初頭にウーマンリブが始まった頃、彼女たちはまだ20代、30代だった。己れの生きにくさにもがき、社会に向かい、「NO」と叫んでいた。あれから約半世紀の間、彼女たちは、時代に何を遺そうとしてきたか?



▲監督第3作『レオニー』
7年の歳月をかけて完成させた日米合作映画『レオニー』。日米の美しい風景の中に繰り広げられる、哀しくも力強い、一人のアメリカ女性、世界的な彫刻家イサム・ノグチの母レオニー・ギルモアの物語。



▲監督第2作『折り梅』
原作は愛知県・豊明市在住の主婦 小菅もと子著『忘れても、しあわせ』(日本評論社)。実話に基づいたストーリーは、老いと介護という高齢化社会の日本で誰もが抱える問題をテーマに展開。

◆2016年10月15日講義より

一つ道ができれば 必ず社会は変わる

2016年9月の民進党代表選で、圧倒的多数の支持を受け、女性初の代表となった蓮舫さん。民主党政権時代の事業仕分けでの舌鋒鋭い発言は未だ記憶に新しい。蓮舫さんが求めるのは、税の公正な分配だ。無駄を切り、本当に必要な人へ適切な支援を。「いばらの道かもしれないが前を向いて進んでいく」。蓮舫さんの熱い思いが語られた。

蓮舫さん

【プロフィール】 東京都生まれ。大学在学中に芸能界デビュー。青山学院大学法学部を卒業後、司会やレポーターを経て報道キャスターに。2004年7月参議院議員東京都選挙区で初当選。以降2期連続当選。当選後は、子育て支援政策、税金の無駄遣い問題、人口減少問題等に取り組む。内閣府特命担当大臣、参議院東日本大震災復興特別委員等を歴任。民進党代表代行を経て現在は、民進党代表。19歳男女双子の母。



「ご婦人は政治に口を出すなど言われた時代もあった」

報道キャスターをしていたときに、ある大物代議士にマイクを突き付けしつづき質問をしたら「ご婦人が政治に口を出すものではない」と言われました。あれから23年が経ち、女性の声が政治を左右するようになりました。昨年の安保法案や待機児童問題では、女性が国会の前に来るようになりました。人に誘われたのではなく自分の意思で、です。これは大きな変化だと思います。

政治とはひと言でいうと税金の再分配

政治とは何か。ひと言で言うなら「税の再分配」だと思います。これは国にしかできないことです。しかし、日本ほど税金の使い道に対して鈍感な国はありません。自分たちの納めた税金が一体に何に使われるのか無頓着なまま、気付いたら一千兆円の借金を背負う国になっていました。これは政治家の責任だけではありません。その政治家を選んだ国民の責任でもあると思います。

借金をして公共事業をする、借金をしてシニア世代を優遇する、借金をして自分の町に新幹線を敷

く。そして引つ張ってきた政治家の銅像を建てる。こんなことがなぜ許されてきたのか。なぜ鈍感だったのか。

12年前に参議院議員に当選し政治家になったとき、毎晩考えたのがこの問題でした。

長く放置されてきた女・子ども問題

私は選挙活動でマニフェストならぬ「ママフェスト」を掲げ、これまで関心を持たれてこなかった、女性と子ども問題に取り組みたいと思っていました。

きっかけは、30歳のときに男女の双子を産んだことです。東京では病院が予約一杯で出産をする場がない。産んだら今度は保育園が一杯で、働くことをあきらめなければならぬ。少子化だと言われているけれど、子育て世代に全く手厚くない。国は待機児童の問題は放置して、女性は子どもを産んで働けという。こんな冷たい政治はない。これを何とかしなければと思ったのです。

無駄を徹底的に切り、予算の適正配置を

当選してすぐにしたことは、少子化予算の洗い出しです。90兆の

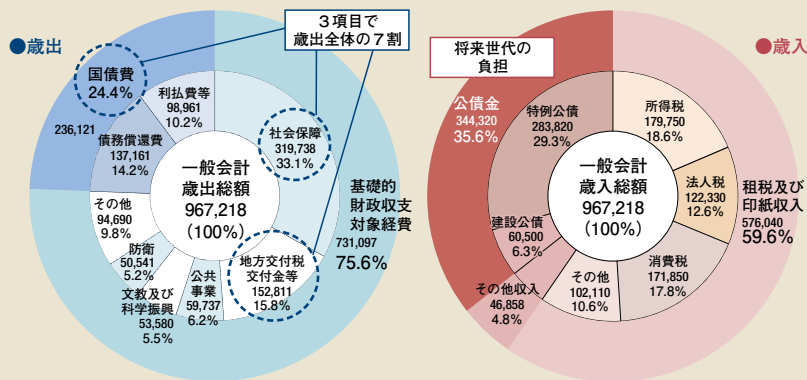
予算の中でその額は3〜4千億円にすぎなかった。これでなぜ子どもたちに優しい社会だと言えるのでしょうか。そこで私は、予算の無駄を徹底的に見直して、そのお金を子どもたちのための予算に回すと決意しました。それが行政改革に取り組み始めた理由です。そして気付いたら事業仕分けの「仕分け人」になっていました。

次世代スーパーコンピュータプロジェクトの仕分けでは「2番じゃダメなんですか」という言葉だけが切り取られて報道されましたが、あのプロジェクトは、累計で1000億のお金を使いながら説明が不十分でした。それなのに、さらに100億、200億の予算が必要だという。「いったい何に使うのですか」「なぜ世界一にならないといけないのですか」と聞いても「夢のためです」と。夢のために1000億円も出せるのでしょうか。

こんな支出が、これまで一度も追求されることなく、「前任者がやってきた」ですまされてきたのです。このような事業にメスを入れ、予算の組み替えをして子どもたちの予算に回そうとしました。

▶平成28年度一般会計予算
(平成28年3月29日成立)の概要

平成28年度一般会計予算は約96.7兆円ですが、このうち歳出についてみると、国債の元利払いに充てられる費用(国債費)と地方交付税交付金と社会保障関係費で、歳出全体の7割超を占めています。一方、歳入のうち税収は約58兆円であり、一般会計予算における歳入のうち、税収でまかなわれているのは約6割弱であり、4割弱は将来世代の負担となる借金(公債金収入)に依存しています。



しかし、道半ばで民主党は下野し仕分けはとん挫しました。とても悔しかったです。

ただ、5000の事業について、予算がいくらで何に使われているのか、すべて「行政事業レビュー」として情報公開されるようになり、今政権もこれだけは続けてくれていて、インターネットで誰でも検索して見ることができ、これがあから、私は予算委員会でも無駄を指摘し続けることができます。みなさんの血税を有効に使うよう、この活動を地道に続けていこうと思っています。

**行革なら誰にも負けない
プロと自認**

私は政治家として行革のプロだと自認していますし、国会質問での突破力や提案力は、誰にも負けないと自負しています。しかし、政治はまだまだ男性中心社会です。女性も男性と同じかそれ以上の技術と能力を持たなければ相手にされません。一方で、政治は女性が多くな世界でもあります。何も質問をしなくても、スカートをはいてニコニコしていればいい。そんなマスコット扱いの女性議員がまだいることも現実です。

**男性も女性も関係ない
個性が輝く社会を作りたい**

男性も女性もない、個性を活かして本当にがんばっている人たちが輝ける国を作りたい。女性が出産や子育てのために仕事をあきらめることなく、自分で選択できる社会を作りたい。

国は2020年までに女性管理職30%という目標を掲げていますが、今の日本ではそれほど管理職になりたい女性はいません。それよりも、どんな仕事であっても誇りを持って働ける、そんな自分を認めてもらえる社会を作りたい。

たとえば、スーパのレジ打ちでもプロとして誇りを持てる、ステップアップしていける道を作っていく。がんばれば先があると示していく。その結果、女性リーダーが当たり前に生まれていくような社会にしていきたいと思うのです。

ただ、それはものすごく難しい。国会議員の大多数は、今の女性の置かれた状況に対して鈍感です。子育て経験のない人も多います。

選択的夫婦別姓がいつまでも実

現しない。配偶者控除、同じ女性なのにどうして税制が区別されるのだろう。寡婦控除、なぜ結婚したくない母子家庭と離婚・死別をした母子家庭の間に税制の控除に差があるのだろう。

このような矛盾が何年にもわたってまかり通ってききました。なぜこれまで変えられなかったのでしょうか。

私たちはそれを変えていく力を持たなければなりません。それが、民進党の代表になると覚悟した大きな理由です。

女性がんばればとか、女性を活用とか、女性が活躍とか、スローガンがようやく出てきたのはありがたのですが、女性の現実や感覚と少しずつずれている。これを正していく作業が、次の政治に求められると思います。

**一つ道を作れば必ず
後の世代が広げてくれる**

女性がトップに立つことは大変です。私は東大卒でもなく、芸能界出身、40代の女性です。馬鹿にされない方がおかしい。国会議員にはピカピカの肩書の人はいませんから。でも、こんな人間が一人でも出てくると、後に道ができます。



まず。道を作りましょう。今の自分を誇りに思い、前に向かって進みましょう。その先には必ず道ができます。

道を作れば、絶対に次の世代が道を広げてくれます。これの繰り返しです。悔しいけど、一気に道は拓けません。でも繰り返すことによって、前を向き続けることによって、社会の空気は絶対に変わります。

こういう政治をこれからもやっていきたいと思っています。

◆2016年10月15日講義より

シアターこそ学びの場

大学卒業後、NHKに就職し、69歳で副会長を退くまで第一線で働き続けた永井多恵子さん。現在は、人生の第二幕目。世田谷パブリックシアター館長として、日本に演劇の文化を根付かせ世界を魅了するアーティストを育成するべく活躍している。

永井多恵子さん

【プロフィール】 大学で学生演劇に打ち込む。将来は演出家を目指していたが NHK の入社試験にたまたま合格。教授の勧めもあり入社することになった。当時は男女不平等が当たり前。女性は結婚したら早く辞めてくれという風潮の中、定年まで勤めあげる。仕事で大切なのは、最初の数年はとにかく基礎基本を覚えること。一つの分野で10年は経験を積み、その分野で認められること。勝負はそれから。



NHKは国営放送ではない

NHKは放送法に基づく「特殊法人」です。理念は民主主義に基づき市民の立場に立つこと。よく誤解されるのですが、NHKは公共放送であつて国営放送ではありません。ですから時の政権に対してマイナスイメージを指摘することもあります。それに対し、私の在任中にも政治家からクレームが入ることもありました。現場の制作者たちは、自分たちの主張を曲げず番組を守ろうとがんばってきたと思います。

イギリスの公共放送BBCは大変国民の評価が高いです。なぜでしょうか。かつてサッチャー政権がフォークランド戦争を始めたときに、BBCは戦争反対のキャンペーンを徹底的に行いました。結局イギリスは戦争に敗れ、BBCは国家と戦える公共放送として、国民の信頼を一気に高めたと言われています。

日本でも、もし政権があまりにも間違つた方向に走ればきちんとそれを伝えるのが公共放送の本来あるべき姿だと思います。

ただ、NHKの弱みは、放送法

に定められているとおり、事業予算が国会に承認されないと決められないこと。総務省を通じて国会に予算案が提出されるのですが、ギリギリまで国の承認が下りないということがよくあり、裏部隊は大変苦労しています。

NHKの財源は受信料です。私も新入社員のとときに受信料の集金をしたことがあります。「NHKは観ていないので払わない」という方も多くいました。しかし、災害などのときに真っ先に報道するのは公共放送です。NHKは、その意味では種の「社会的装置」であり、観る、観ないに関わらず受信料をお支払いいただくというふうになっています。ところがこれを納得していただくのはなかなか難しい。これは世界各国でも共通の悩みようです。イギリスのBBCでは、払わない人は投獄されるというほど徹底しています。

文化劣国日本を変えたい

演劇家志望だったこともあり、NHKの番組の中でもドキュメンタリーが好きです。ドキュメンタリーとはドキュメンタリードラマの略で、綿密なリサーチに基づいたドキュメンタリーをドラ

マ仕立てにした番組のことです。ドラマにすることで、感性レベルですと内容が入ってくる。感性に訴える手段としてドラマは大変有効だと思います。

50年勤めたNHKを退職して、世田谷文化生活情報センター（パブリックシアター）館長として私の人生の二幕目がスタートしました。

私の育った家庭では、子どもの頃から家族で芝居を観ることが日常化していて、歌舞伎もよく観に行きました。

NHKの局員だったときには、芝居の劇場中継をさせていただいたこともあります。1980年から1990年代のバブル期を経て、モノより文化だというふうになつて、流れが変わってきました。地方にも公共劇場が多数建てられるようになり、NHKでも放送を通じて文化の大切さを伝えてきました。

しかし、日本は残念ながら文化劣国です。文化に予算がつかない。今年ようやく、文化事業に1000億円が計上されましたが、フランス、イタリアとは桁違いです。また、フランスやイタリアには国立劇場がいたるところにありますが、日本は全国に3軒しかあ

●世田谷パブリックシアター

〒154-0004

東京都世田谷区太子堂4丁目1番地1号 世田谷パブリックシアター

TEL:03-5432-1526(代表)

<https://setagaya-pt.jp/>



世界を魅了する アーティストが少ない日本

りません。地方には、自治体が運営する公共劇場がありますがソフトがありません。今、自前で中身をつくれる劇場は、手前みそですが、私が館長を務めている世田谷のパブリックシアターくらいではないでしょうか。

日本には、文化大臣はいません。日本の国立大学には演劇学部のある大学がありません。世界に誇れる演出家や俳優が生まれる仕組みがない。これは世界的に見てもとても恥ずかしいことだと思います。

2020年に東京オリンピックが開催されますが、それまでの4年間に日本の全国各地で文化プロ

ラムが実施されます。ロンドンオリンピックの文化プログラムは大変素晴らしいものでした。日本もそれに負けないものをつくらなければなりません。

しかし、日本に世界を魅了するようなアーティストが何人いるのでしょうか。

いるとしたら歌舞伎や狂言など、伝統芸能の世界だけではないかと思っています。

世田谷パブリックシアターでは狂言師で俳優の野村萬斎氏を芸術監督に招き、優れた演劇作品を発表しています。

文字と共に シアターで人間育成を

演劇の文化を広げていくためには、観客育成も必要です。芝居を観るという素地がなければどんなに優れた作品でも心に入っていくません。ですから世田谷パブリックシアターでは、子ども向けのワークショップも多数行っています。これは収入にはなりませんが、未来への投資であり公共劇場としての使命だと思っています。

学校教育も、変えていく必要があると思います。今、子どもたちは文字を中心に勉強していますが、

グローバル化の時代に、世界の人々とコミュニケーションをしていく上で、文字を学ぶ前に、絵を描いたり、歌を歌ったり、踊りを踊ったり、身体を使ったコミュニケーションを学ぶことが必要です。これは演劇の基礎そのものです。歴史をみれば、文字よりも、歌や踊りが先なのです。身体を動かし感性に伝えるこ

とを文字と共に学べばバランスの取れた人間に育ちます。劇場には人間のための豊かな学びがあります。皆様にはぜひ劇場に来ていただきたい。劇場を通して何かを学び掴んでほしいと思います。日本を軍事大国ではなく世界の人々の心を繋ぐ文化大国に育てていく必要があると思います。



▲世田谷パブリックシアター内観 (撮影:細野晋司)



▲『マクベス』 構成・演出・出演:野村萬斎 (撮影:石川純)



▲レフ・ドージン演出作品28年ぶりの来日!ロシア国立サンクトペテルブルグ マールイ・ドラマ劇場『たくらみと恋』が、2017年2月18日(土)・19日(日) 世田谷パブリックシアターで上演されます。

赤松政経塾 参加者の声



困難を
乗り越えてきた
先輩に学べる幸せ

製薬会社部長職
メディカルジャズシンガー
女性労働協会認定講師
薬剤師

西出幸子さん

製薬会社で医薬情報担当者の先駆けとして全国紙にも紹介され、部長職まで続けることができましたが「すぐ結婚して辞めるのでは」などと女性であるがゆえの差別を受けたことも多くありました。しかし、諸先輩の講義を拝聴し、どんなに力のある方でも女性ゆえの様々な苦労を乗り越えてこられたことを知りました。医療もまだ小児や女性には冷たいと言われていますが女性の時代を創ってくださった赤松先生、先輩方々から今後助言をいただき生命の世紀を新しい歴史を創る一人になれるよう成長して参ります。

女性も働いて
社会の中心へ

一般企業勤務

慶野久絵さん



非正規社員として8年間仕事をしていましたが、子育てがひと段落したため、社内の正社員登用試験に挑戦して合格。現在、総務部の正社員となり、3000人程いる非正規社員の労務人事担当として、非正規社員の女性も、結婚・出産後も辞めることなく、生き生きと働き続けられるようサポートしています。女性社会の中心にすることができれば社会は変わります。社会で活躍している女性に会い、学ぶ場を求めて赤松政経塾への参加を決めました。新しい世界との出会いにワクワクしています。



自分が役立てる
何かを見つけない

金融機関勤務

榎本恭子さん

きっかけは、出張先で見た新聞記事です。当時の私は、毎日が充実していました。でも、コンフォートゾーン内だけで行動すると視野が狭くなります。自分の視野をもっと広げたいと思い、赤松政経塾に入塾を決めました。参加をして、自分と異なる分野で活躍されている方が多く、とても勉強になります。また、講師の方々は一流の方ばかりで、一つひとつの言葉に重みがあり、気付きを沢山いただいています。活動を通して「私が世の中で役に立っていることは何か、何をやるのか」を見つけないと思っています。

社会(未来)は
私たちの手で
変えられる

税理士・社会保険労務士

森 なつきさん



子どもが生まれて母となり、今まで気にも留めていなかった「食」「環境」「政治」、そして、子どもたちの未来に何を残せるかを考えるようになりました。税理士・社会保険労務士として、中学校に租税教育や社会保障の授業を担当していますが、その時には、この社会は思いやりでできていること、自分たちの社会(未来)は自分たちで変えられることを伝えていきます。私自身が積極的に政治に参加し、子どもたちに自分たちの手で社会(未来)を変えられるという姿を見せたいと思っています。